

近時筆を維新前後に於ける人傑の傳紀に着くるもの多しと雖も概して材料置乏にして論斷太だ精しからず友人足立荒人君は山口縣人にして曾て我讀賣新聞に記者たり夙に維新過渡の歴史を研究して最も力を木戸公の事蹟に致し拮据經營博く記録に討ね且つ當年公と共に國事に盡瘁せし伊藤侯井上伯野村子福羽子渡邊子等を歴訪して親しく公の偉績を聞き又故老藹藹の言を取捨して公の一世を知り之を編輯して讀賣新聞に載す松菊餘影即ち是なり俯仰三十年公の面目躍如として恰も聲あるが如し蓋し偶然にあらざるなり思ふに此書一木戸公の傳紀たるに止らず實に堂々たる一部の維新史ならん今や足立君游學して歐洲にあるも其歸朝の日に於て更に之を補足大成するあらんには龍睛一點綱目悉く舉り後世の史家を益すること決して尠少にあらざるべし

丁酉七月

(本書前文)



初の本格的な木戸孝允伝

限定三百部復刻

松菊餘影

足立荒人〔著〕

著者の足立荒人は後に読売新聞の副社長までなった名記者でした。取材にあたっては「長州出身」という地の利を大いに活かし「維新の現役」を存分に利用したと思われます。

松菊餘影

足立荒人著

(一) 幼時

木戸孝允本姓は和田、小字は小五郎。天保四年己の年六月廿六日を以て長州萩城下江戸屋横町に生る。父を昌景と曰ふ。醫を業とし、後藩主の御匙と爲る。女兒二人あり、皆先妻の出にて、小五郎獨り後妻の生む所たり。小五郎故あり出で、桂氏を繼ぐ。桂は萩藩の名族にして、秩祿二百石に上りしも、不幸にして二度減俸の科(主人卒去の時)までに養嗣子の定らざる者は俸祿の三分一を削らる(に)逢ひ、家計甚衰へ且養母も亦幾もなくして死し、加ふに小五郎猶幼なるを以て、家政は悉く實家より監督せり。

父和田昌景は善諧好諷の人なり。藩主の侍醫青木周彌(青木周藏子の祖父)と

松 菊 餘 影

松 菊 餘 影

く各地の情報を齎して、銜かに山口に來り、長州侯と膝を交へて天下の形勢並に將來の方針を論じ、少焉にして兩侯は相辭して席を去り、後には兩藩の從士等のみ居残りて、酒を飲むやら歌ふやら、遠慮用捨も無禮講に夜を深かし、相方入り亂れて、雞魚寝せる中に、津和野藩の名士清水格亮なる者ありて、酒氣に渴を覺えしにや、夜半不圖目を覺まし、鉄瓶や有ると枕上を探るの時隣室猶燈火の炯然きて、桂の端坐せしを瞥見しが、朦朧たる睡眠現の如く夢の如く、別に何をし居るかとの疑も起さずして、其儘又スヤ／＼と酣睡りし後、一二時も過ぎたらんと思はるゝ比、又候眼を覺して、フト見れば窓外はや東雲の白みにや、障子の外は微白きに隣室猶燈影の淡くして、桂の影は前の如し、始めて不思議と思ひしかば、頭を擡げて之を望めば、桂は猶凝然端坐して、一心不亂に物讀む体、何書かと思へば、是れぞ即ち先刻の三都往復の書面に、桂は側目も振らず、點檢つゝありき、清水感歎始めて桂の常人にあらざるを知り、銜に其爲人に服す。



『松菊餘影』の叙述と内容

佛敎大学教授

青山忠正

成立経過と著者 本書の底本、足立荒人著『松菊餘影』は、明治三十年（一八九七）七月に、春陽堂から刊行された。題名は、木戸孝允の雅号「松菊」にちなむ。

木戸孝允（慶応元年九月、桂小五郎から改名）が京都鴨川畔の別邸で病死したのは、明治十年（一八七七）五月二十六日である。その直後から『東京日日新聞』は社説で、木戸の略伝を六回にわたって連載した（五月二十八日～六月四日、二十七日は日曜で休刊日）。筆者は桜痴福地源一郎である。折から西南戦争の最中で、木戸が死の二日前に、「西郷モ一太抵ニセンカ」と大声で呼んだことは、第六回（六月四日）で紹介された。このせりふは現在では広く知られるが、この記事が初出である。

右の事実からも察せられるように、木戸に対する人々の関心は高い。没後五十周年の昭和二年（一九二七）には、決定版とも言うべき、妻木忠太ら編纂の『松菊木戸公伝』上下二巻が明治書院から刊行された。その前後から現代に至るまで、簡単なエピソード集や小説風のものまで含めれば、木戸伝と呼べる書物は、数え切れないほど存在する。

そのなかで『松菊餘影』は、もともと『讀賣新聞』朝刊に、明治二十九年（一八九六）四月二十六日（日曜日）から八月十一日（火曜日）まで八十一回にわたり連載された記事を、翌年に単行本として刊行したものであり、初の本格的な木戸孝允伝である。

内容について 内容はあくまでも人物伝だが、木戸の生涯を通じた、さまざまなエピソードを主体に綴られている。詳細な政治過程の叙述や、権力構造の分析といった視点は、この当時、成立していないので、その文体は、かえって現代の読者にも、たいへん親しみやすく、分かりやすい。それに、文献史料が現代ほど整備されていないので、著者は、主に関係者からの聞き取りを材料に叙述しているようだ。そのエピソードを少しだけ紹介してみよう。

木戸は、天保四年（一八三三）、長門国萩城下に生まれた。実父は、毛利家の家臣で医師の和田昌景である。この昌景は、だじゃれが大好きで巧みだった。隣家に佐伯丹下という者があり、古武具の鑑定を得意としていた。ある日、昌景が佐伯に、我が家には先祖伝来の具足があると告げると、佐伯は大喜びで和田家にやってきた。ところが家内を見渡しても、幼い小五郎が座敷にいただけで、それらしきものは見えない。佐伯が不審に思つて問うと、昌景は小五郎を指し、「あれじゃ、あれが愚息（具足）じゃ、しかも先祖伝来ぞよ」。佐伯は呆然として、返す言葉がなかった（二頁）。本書は、この挿話から始まる。

坂本龍馬との交流に詳しく触れている点も、特徴の一つである。例をあげれば、慶応二年（一八六六）正月二十三日夜、伏見の寺田屋で、龍馬が奉行所捕り手に囲まれ、危うく逃げ出すという事件があった。このとき階下の風呂場にいたお龍が、異変に気付き、そのままの姿で駆け上がり、急を告げたという。この話は、坂崎紫瀾が龍馬をモデルにした政治小説『汗血千里駒』（春陽堂 明治十六年）で取り上げ、世に流布した。『松菊餘影』では、その叙述に続けて、のちに木戸が龍馬と会った際、「己も一ぺん裸体で御注進と云ふ様な、有り難い目に遭て見たいがのう」とからかうと、「龍馬、頭を掻き掻き口の内に何かむしゃむしゃ茶を濁す」（二一〇頁）。この辺りは小説調で、真偽のほどは保証できないが、明治の史伝に、その意味での厳密さを望むのは筋違いである。むしろ、こうした記述を、読者は、どう受け止めていたのか、新聞メディアある

いは人物伝に対する需要のあり方という観点から、考えねばなるまい。右のような例ばかりでは、ただのエピソード集と思われかねないが、専門研究者の視点から、見逃せない話も出てくる。明治四年（一八七二）七月、知藩事の一齐免官（いわゆる廃藩置県）が行われるが、木戸はその首謀者の一人だった。通達が行われる当日の七月十四日、呼び集められた諸藩大少参事（本書では「留守居」）たちが、ただ呆然として一言も発しなかったなかで、鳥取藩の沖守固だけは一人、山口藩の杉孫七郎に向かい、「今日はおめでとう存じます」と祝いを述べた（二〇九頁）。鳥取藩は、明治元年当時から、領有制の解消について積極的な姿勢を見せていた。木戸が文明化に向けた世論喚起のため、四年五月に創刊した『新聞雑誌』（二〇二頁）の第八号には、「池田（慶徳）元鳥取藩知事」の、郡県制を是とする上書が掲載されたほどだった。そのような背景を踏まえれば、右の沖権大参事の発言は、さもありませんと思わせるだけの迫真性を持っている。その「事実」は、政権奉還から版籍奉還を経て廃藩置県に至る政治過程を、より深く理解するための大きな手がかりを与えてくれる。

本書は、おおむね以上のような内容を持つ。維新期の人物伝として、時期が早く、しかも叙述として信頼性が高いのは、島田三郎『開國始末 井伊掃部頭直弼伝』（輿論社、明治二十一年）、勝田孫弥『西郷隆盛伝』（西郷隆盛伝発行所 明治二十八年）などである。憲法発布（明治二十二年）を契機に、明治という時代の始まりが改めて意識され、「御一新」と、それを担った人物が歴史的な存在として位置付けられてゆく。『松菊餘影』も、そのような歴史意識形成の一環を担うのであろう。明治二十年代から振り返った「幕末・維新」という構図が出来上がってゆく過程を捉えるうえで、史学史的な史料という性格をも、本書には見出しうるのである。（本書解説より）

■解説の末尾には「新聞連載の文章」と「本になった文章」の相違を詳細に調べた一覧表も掲載してあります。

松菊餘影 目次

幼時 孤剣長鋏 斎藤塾 有
備館の都講(上中下) 長亭短駟
秀気英物 幹旋勧誘 京洛の風
塵姉 小路少将の横死(上下) 将
軍御迎論(上下) 勇往奮進 嫉
風妬雨 四面楚歌(上下) 忙裏
閑談 田螺の化物 悲風慘雨玄
関の大砲 路上の放尿 橋下の
乞食 寡婦と同居 孤邪狸耶帶
の高い町人 三味線の胴 高杉
桂を覓む 剪燭換手紙 高杉大に
桂を罵る 木戸準一郎と改む

西郷来たらす木戸佛然木戸黒田の
会见(上下) 敵の監察を還放す
木戸将に捕はれんとす(上中下)
薩長土連合 坂本木戸の書状を利
用す(上下) 木戸坂本中岡の墓に
題す 神戸及び堺事変の処分(上
下) 五箇条の御誓文公示の困難
耶蘇教徒処分 御即位式の地球儀
幕府非恭順派の処分 経倫の大
策行はれず 忙裏閑筆 藩籍奉
還会藩士民の賑恤禄を辞する事三
度(上下) 脱退騒動(二七) 新聞
雑誌の創刊 廃藩置県(上下)
欧米漫遊(二六) 征韓論の破裂

佐賀騒動 台湾征討再び参議とな
る 木戸対島津板垣の衝突(上下)
聖駕別送へ臨幸 熊本秋月及び萩
の乱 西南の役(上下) 大星隕牟
結論

巻頭別刷・題辞

山県有朋、西郷従道、勝海舟、
佐々木高行、野村靖、鳥尾小弥太、
渡辺昇、品川弥二郎、田中光頭、杉重
華(孫七郎)、福羽美静、楠本正隆、木
戸孝允より福羽美静宛書状。福地
桜痴ほか。

A3判以上までありますべて原寸です。

本書の特色

- ① 練達記者の軽妙な文章の上総ルビのため、とても読み易い。
 - ② 維新体験者が沢山生きていた時代、記者特有の「足」で取材した強み。
 - ③ 古書店にも無く、専門家にさえあまり知られていなかった稀書。
- とにかく明治期の本にしては「読み始めたら面白くて止められない」
すぐれた「維新通史」としても広くお勧め致します。
- 極小部数につきお早めにごぞぞ！

■体 裁 A5判並製 310頁

■定 価 七千円(税込・千別)

■特 価 五千円(税・千共)

■特価締切 24年1月20日(厳守)

■販売開始 24年3月上旬

限定二百部復刻

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

●申し込みハガキにある三点セット特価をご利用下さい。

山口県周南市銀座2-13

0834(0)295

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>